

シャルダン作《芸術のアトリビュート》（1765、ルーヴル美術館蔵）について

廣瀬 聡平（日本大学）

シャルダンの晩年に制作された 通称《芸術のアトリビュート》（1765年）には、ディドロ(1765)を中心としたサロン評以降、先行研究が認められる。代表的な研究としては、晩年の様式の一つとして本作品を位置づけた、ウィルデンシュタイン（1933,WILDENSTEIN）のカタログや、中心主題となっている彫刻作品、ブーシャルドン（1698-1792）の《パリの擬人像》（1745年）を念頭に置き、モチーフ構成における画家の意図を考察した、ローザンバール（1979,1999,ROSENBERG）のカタログがある。

しかしながら、それらには、美術史上の先行作品との比較検討を行った分析は、認められない。本発表の趣旨は、モチーフ構成におけるシャルダンの意図を、図像学的に考察することである。

第1に、本作品はシャルダン以前の静物画と比べ、特異なモチーフ構成をしている。そこには、16、17世紀寓意版画との共通点があり、全身彫刻像の存在が、重要な意味を持っている。

静物画の中に全身彫刻像が描かれた作例に着目すると、①人物と共に描かれる場合、②コレクションと共に描かれる場合、③芸術に関するモチーフと共に描かれる場合の、三つの類型に分類することができる。本作は、この③の類型に位置づけられるが、モチーフ構成の特徴を探ると、先行する静物画作品以上に、ファン・デル・ストラテン（1523-1605）とサーデレルー世（1550-1600）の寓意版画との類似を、指摘することができる。

例えば、ストラテン作の連作版画《王子の規範》（1597年）は、各プレートにおいて、神話の神々が寓意像として画面中央に坐し、寓意に関連したモチーフが足元に散らばっている。その中でも《学芸》(2008,LEESBERG)のプレートには、芸術の神・アポロンを中心にして、芸術に関するモチーフが数多く足元に描かれている。この構図は、シャルダンの作品におけるモチーフ構成と類似している。

同じく、ファン・デル・ストラテン作の《ローマの寓意彫刻像》(1573年以降;2008 LEESBERG)では、ミネルウァの全身彫刻像が画面中央に描かれており、都市ローマの擬人像として用いられている。画中における全身彫刻像が、都市の寓意として描かれた場合の、一作例である。

シャルダンは以上のような寓意版画の影響を受けつつ、静物画としては珍しいモチーフ構成、及び全身彫刻像の扱いをしたのではないだろうか。その可能性について、問題提起を行いたい。